

## 令和2年度 第2回沼田市市民構想会議の概要について

- 1 日 時 令和2年8月6日（木）午後2時から午後3時50分
- 2 場 所 沼田市役所 第2委員会室（テラス沼田5階）
- 3 出席者
  - （1）委員 片桐徹憲委員、小野要二委員、井上滋光委員、青木富士夫委員、小林昭紀委員、生方秀二委員、岡嶋稜子委員、小野里順子委員、田辺祐己委員、角田郁子委員、六本木勇治委員、林康夫委員、小林好委員、山田龍之介委員、萩原忠和委員、坂井隆委員、長沼祐子委員、小池大介委員（18名）
  - （2）アドバイザー 篠田 暢之氏
  - （3）沼田市 五十嵐副市長、川方総務部長  
（事務局：矢代企画政策課長、生方政策推進係長、清水副主幹）
- 4 配付資料
  - ・ 次第
  - ・ 令和2年度第1回沼田市市民構想会議の概要について
  - ・ 令和元年度沼田市市民構想会議各検討テーマの主な意見
  - ・ アドバイザー提供資料
- 5 概 要
  - （1）開 会（事務局：企画政策課長）
  - （2）委嘱状交付  
五十嵐副市長から新委員へ委嘱状を交付した。
  - （3）会長あいさつ  
＜生方会長＞  
暑い中体調に留意いただきたい。
  - （4）前回の会議結果について（事務局：企画政策課長）  
「第1回沼田市市民構想会議の概要について」により説明した。
  - （5）議 題
    - 1）提言に向けた検討について

## <アドバイザー意見>

パラダイムは「枠組み」と訳されており、特に科学的発見や技術の進化、暮らしや政治、私たちの価値観を変えるという概念です。1986年以降、欧米では、政治の世界で未来のための国作りとして使用されてきました。小さな政府で効率よく、安全かつ安心な社会にするというのがパラダイム・チェンジの政治版でした。新型コロナウイルス感染拡大防止のため、政府が提唱している新しい生活スタイルは、従来の枠組みを変える必要があります。ハーバード大学の研究所では、薬ができるのは2024年くらいになるだろうと予想しています。私たちはこの生活を最低4年は強いられる、あるいはこれを普通のことと考えないといけなくなってくるのです。価値観を変えざるを得ないのです。

少子高齢化の進行により、1年に50万人の人口が減っています。中核都市1つ分が毎年なくなる現実は、沼田においても押し寄せてくるでしょう。人口減少に対応する街づくりへの転換をこの市民構想会議でもしっかりと議論していく必要があると思います。行政に置き換えてみると税収増だったものが税収減になると補助金や事業など、昔は良かったものがこれからは大変になっていきます。借金をしてでも設備投資をすれば良かった時代から縮小均衡経済となります。インバウンドでも日本の観光産業は打撃を受けており、量から質の街づくりに転換していかなければなりません。従来マイナスであった部分が考え次第でプラス要件になっていく時代がきています。わかりやすい例として、テレワークによる働き方改革が加速することにより、地方での生活が首都圏で生活する人から熱い注目をされているのです。魅力ある地域づくりにより、人口減少の中、大きく人口を増やせなくても維持できる。維持こそ最大の成長です。このチャンスを皆さんの意見で豊かなものにしていただくと沼田の未来は楽しくなってくると思います。従来は形のあるものを作ればよいということでした。もちろん必要なものは作らなければなりません。今は価値観の転換となり、形のない、目に見えないものが再評価されています。それは歴史や文化、風景、自然などです。文化遺産や歴史遺産を活用することなどです。

コロナ禍により、私たちの意識も変わってきています。議事録の説明でもありましたが、1番目として、コロナにより命の重要性を再認識させられたということです。沼田は非常に健康に良い地域であり、水も美味しい、空気もいい、自然が豊かである。これらで上手く仕組みを作れば、時代の流れに沿えるのではないのでしょうか。2番目として、やはり家族は大事であり、家族の延長に地域コミュニティがあり、地域コミュニティが壊れてしまわない街づくりを考え

ないと経済的にも大変なことになると思います。3番目として、コロナ禍により、先の見えない経済活動と先行きの不安な未来に対し、多くの人が悶々とされているのではないのでしょうか。日本の未来の漠然とした危機感は国民的心情になり始めています。だからこそ、エビデンスを伴って、未来はこうなるという議論を進めるべきであると思います。デジタルの世界がとても便利で、生活やビジネスを変えると同時に、それが進むほど、私たちはアナログである五感がいかに大事かということがこれまで以上にわかってきます。アナログというものが沼田にとってどういう意味と価値を持つのかということが理解されれば、沼田の未来にむけた議論が可能になると思います。以上、3点の視点から議論をしていただければ問題整理も早いと考えます。

#### <意見交換>

- 地域コミュニティの再構築が人口減少対策でもあり、コロナ禍の枠組みを変えていくことにも繋がっていく。
- コロナで街の再発見もあった。歩いてみると遊歩道もあり、沼田も良いところがある。
- 人口減少が一番大きな課題。後継者不足で美味しい食堂が突然閉店するということもある。経済を支えていかないと市が厳しくなる。
- 1～2か月もの間、売上ゼロは経験したことが無かった。愛郷ぐんまプロジェクトやG o T oキャンペーンなど良い事業であったが、東京都が対象外のため気持ちよくお客様をお迎えできず、従業員の感染にも気を使う。たとえ話でブレーキとアクセルを同時に踏んでいると言われるが、たくさんのお客様に来てもらいたい気持ちと来ないで欲しい気持ちと複雑である。
- 同じテーマであっても、ウィズ・コロナになると昨年とは全然目標が違ってくる。コロナ時代の観光であり、地域づくりであり、少子高齢化問題であるということを一早く皆さんに提言できれば良い
- 経営者が高齢であるため、地域で力を合わせて、人口減少対策に取り組む必要がある。余裕があるうちにM&A（合併買収）をすれば効果があるが、早めに対策をしないと効果はない。コロナ以前からの問題ではあるが、地域コミュニティなどで助け合っていく必要がある。
- 人口減少は歯止めがきかない。東京一極集中の中、1年間で群馬県も人口が減っている。デジタル化が進んでいるためATMの使用が少なくなり、機械も減っている。デジタル決済が進んでおり、コロナの影響で更にデジタル化が進む。農業分野も接触型から非接触型へ転換し、耕作放棄地問題、鳥獣害

対策などに取り組んでいかないと一度放棄された土地を戻すことは難しい。今の代がいなくなれば後を継ぐ人は少ない。なんでも揃っている都会で暮らしていた人にとって、田舎の生活は思っているほど簡単ではない。

- SDGsに取り組んでおり、住み続けられる街づくりが大切である。街づくりから遠ざかっていた若者を近づける努力をしている。公共財産も外向きに作られたものが多く、観光を中心とした街づくりが進められてきた。ここに暮らしている人たちが幸せを感じられるような施設の使い方であればこれからも使っていけるのではないか。ここで暮らしている人、働いている人たちの幸せを願って街づくりに取り組んでいく必要がある。地域と社会と経済が一体となって、地域の歴史や文化を育み、住み続けられる街づくりをテーマとしていきたい。
- ソロプチミストではコロナ禍のためにアルバイトができなくなった学生を対象に奨学金を準備した。利根沼田は高齢者が多いので世代をこえた生きがいづくりができるようにしていきたい。
- 広報の仕方として外に向けてではなく、地域住民に向けて、沼田の魅力を伝える。水や空気など沼田には良いところがあるが、沼田の災害の評価を地域の人には知らない。地域の人が沼田の良いところを知ることが一歩。広報力の向上で内と外に発信し、地域の人へ沼田の良さを伝えることが大切である。
- 維持こそが最高の成長とのことだが、沼田の現状を維持することが大切。広報力の向上により地場産業の情報を発信し、振興に繋げる。働き方改革によるテレワークや農業のブランド化など全国に先駆けたモデルを真剣に考えてみてはどうか。少子化で出生率を高めようとしてもなかなか難しい状況である。女性が働ける状況を整え、維持することが最高の方法である。
- コロナを広めないことが大切。
- 出生より死亡が多く、人口減少はかなり前から言われている。完全に食い止めることは難しいが、緩やかにする方法を考えなければならない。コロナをマイナスと捉えるのではなく、プラスとして、テレワークの拠点を作って人を呼び込むと良い。経済疲弊を打開するために、空いた土地などを無償で貸し出すことなども一つの方法である。
- 農林業では、特に高齢化が進んでいる。沼田の自然をいかして、人が戻ってくる、あるいは友好都市から人を呼ぶなど、農業で生活できる取り組みを発信していければ良い。家の工法も変化してきている。太すぎる材は適さず、合板材の事業もある。沼田の木をもっと使っていけるようにすれば良い。

○少子高齢化があらゆる産業、社会活動に悪影響を及ぼしている。空き家問題は少子高齢化に関連する問題である。沼田は自然災害が少なく、住みよいところなので、税の優遇や近所とのつきあいなど受け入れ側の環境が整っていれば、トライアルホームなどを実施してみたいかと思う。

○群馬県スポーツ審議会では、eスポーツの推進が提案された。地域の自然をいかしたアウトドアスポーツなどで外部の人を呼び込む施策についても話し合われている。沼田も豊かな自然を使って地域を元気にしていく。「小さな社会で効率の良い方法」がキーワードである。地域の良さをいかした活動を発信し、地域が元気になり地域が好きになり、価値観が一体になり、それが沼田への貢献へと繋がる。新しい仕組みを創出していくために、住んでいる人みんなが参加する共生の社会づくりが必要である。

#### <アドバイザー>

1月21日の会議で資料をお配りしたが、ドイツ・バイエルン州では、地元の人が地元をよく知り、地元を楽しむことが観光産業の基本としました。地域住民の交流を最優先する施策とそれに伴う観光振興をまとめています。ドイツでは、コロナ対策についてもメルケル首相はこの考えに沿うということでした。地域が利用できないものは外部の人が満足するはずがない。『主人公は住民』というのは当たり前のことですが、今まで住民は少し我慢して外から来る人を大事にしようとしてきました。安心安全を含めた沼田の住民のための街づくりが大切であるとドイツの施策が教えてくれました。地域の人が自然体で支えあうことが必要であり、住んでいる人が楽しく生活できるようにすることが必要です。ようやく地方都市が輝ける時代がきました。人間が交流できる最適な人口は5万人を超えない人口と言われています。北海道に「ほたて工場」で豊かになった村があります。今や全国地域ランキングで第5位の高収入地域となり、輸出するまでになりました。

実際に沼田に住んでいてもお客様は世界中と考えると大きなマーケットです。在宅で仕事をするのが当たり前になれば、地方への移住が加速し、人口減少を留めることができます。きれいな花には蜂がくるように、住んでいる人が快適なら、幸せそうに生活している人がいれば、そこに人は来るのです。コロナ禍を外的要因として、考え方ひとつでプラス思考にできるのではないのでしょうか。主人公はこの地域の近くの人です。

#### <会長>

新型コロナウイルス感染症により、考え方を変えなければならなくなってきた

ていますが、皆さんの意見をまとめると、①沼田の広報力の向上、②少子高齢化対策、③地域コミュニティの再構築と拠点づくりの3つにテーマを絞ってまとめていきたいと思いますがよろしいでしょうか？

【一同、異議なし】

<意見交換>

○地区公民館を地域コミュニティの拠点となるような場所として欲しい。沼田は中山間地域であり耕作不利地域のため、平地の農産物に価格では負ける。全国では全耕作地の約3割が中山間地域であり、どの地域もブランド化や六次産業化などに取り組んでいる。消費者に生産地まで来てもらい農業に触れて理解してもらおうということをしている。農業の後継者を生産者任せにしているとは続かない時代となり、空き地や耕作放棄地がどんどん増えていく。地域全体で考えないと地域の生活環境が維持できず、そんな地域に若者は残らない。都会から農業をしたいと地方の古民家に住む人もかなりいるため、対応次第で地域を活性化する資源となる。地域は市からの請負型から参加型へ変換し、主体的にかかわっていくことにより、満足度を上げていく必要がある。地区公民館をコミュニティセンターとして、地域のプラットフォームとしての役割を果たす場所が必要となる。市は地域に任せるのではなく、地域をサポートし、市民協働として働きかけていく拠点とすると良い。

○戦時中に野沢雅子さんが沼田に疎開されていたように、コロナ疎開、災害疎開というのが沼田にあっても良いのではないか。沼田の出身者が協力者となり、発信してもらうのも1つの手段である。

○沼田は災害に強いイメージ。保険会社のデータがあれば客観的資料となる。

○今までの常識では想定できない自然災害が起こる危険もある。これまでの基準で沼田が安全とは言いきれない部分もある。

○地域とは人である。新しい当たり前をこれから作っていくことが大事。市民構想会議は市民から始まって市民に帰る議論が一元になると考える。いろいろな立場の人から言葉が投げかけられることで未来に繋がる良い提言が生まれる。これからの後輩たちに何が残せるのか。その人たちが主体になるには年月が必要であるが、街づくりも10年、20年のレベルではなく、40年、50年先の街づくりの提言を届けられれば良い。

<アドバイザー>

テーマを3つに絞ったが、1つにまとめるキャッチコピーを作ってはどうか。大きな枠組みとして『主人公は私たち』『私たちが主人公』などのテーマで議

論するのも良いのではないのでしょうか。ここに住んでいる人が主人公というプライドを持って議論した方が輝く提言となるのではないのでしょうか。

<副市長>

篠田先生から地域が主人公であるという視点で再整備をしたら良いのではないかとの提案をいただきましたが、これは1つの解決方法であると感じました。行政は皆さんからのヒントが重要であり、皆さんの議論が凝縮されて施策となります。

群馬県内で一番外から人を呼び込んでいる自治体は、県中で一番小さい上野村です。沼田よりも時代が先行しているため、地域が無くなっていく恐怖感から地域に村営住宅を作り、若者を呼び住居を提供しています。現在では移住した人が地域に馴染み、地域をまとめる役になっています。移住者の定着率は65%程度で、若い人が区長をしており、村が直接雇用先を手配して、地域の存続を図っているようです。それに比べて、沼田はまだ歴史や資源もあるので同じようにする必要はないですが、1つの方向として地域住民が地域のことを知り、地域を愛して、発信ができるような街づくりをしていく、その街づくりのベースを整備していく必要があるのではないのでしょうか。

2) その他

- ・ 次回の会議日程について説明し、確認いただいた。

<第3回> 10月 <第4回> 11月 日程が決まり次第案内

(6) 閉 会 (事務局：企画政策課長)